

大学におけるアクティブ・ラーニングを取り入れた授業展開への試み

－『保育原理』の授業実践を通して進める「主体的・対話的で深い学び」－

住本 克彦*

新見公立短期大学幼児教育学科

(2016年11月30日受理)

本稿では、アクティブ・ラーニングに関するエキスパートによる「アクティブ・ラーニングを取り入れた授業」の準備・展開・事後指導の実践内容、特に学生の授業後の感想の分析から、その授業モデルを提案した。当該授業の受講者の感想を分析することで、①グループワークが苦手な学生への支援の在り方、②主体的能動的学習を充実させる学習環境の整備（一層のICT活用の充実等）、③教職員の研修参加による教育実践力向上、④学級経営と主体的能動的学習の推進との関連性の研究、⑤体制づくり等の課題が確認された。（キーワード）アクティブ・ラーニング、共同学習、学生参加型学習

I はじめに

現代社会においては、変化が激しく、先の予測が著しく難しい。そこでは、未知の課題解決に向かっていくための思考力や、多様な価値観を共有する他者との「対話」を通して直面する課題を解決できる実践力が求められる。それらを、日本の教育が目指す「生きる力」の要諦であると捉え、21世紀を生き抜くための実践的な問題解決力に結びつくように構造化したのが「21世紀型能力」である¹⁾。この「21世紀型能力」を育成するためには、アクティブ・ラーニング型の授業展開が求められてきている²⁾。

中央教育審議会のいわゆる「質的転換答申」においても、「生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材は、学生からみて受動的な教育の場では育成することができない。従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である。すなわち個々の学生の認知的、倫理的、社会的能力を引き出し、それを鍛えるディスカッションやディベートといった双方向の講義、演習、実験、実習や実技等を中心とした授業への転換によって、学生の主体的な学修を促す質の高い学士課程教育を進めることが求められる。」³⁾とし、学生は主体的な学修の体験を重ねてこそ、未知の課題に挑戦しようとする気概を持つのであり、生涯学び続ける力を修得できるのである。こういった生涯学び続ける力、主体的に考える力を持った学生は、受動的な授業実践の場においては育成することができない。従来のような一方

向の知識の伝達を中心とした授業展開から、教員と学生が双方向で意思疎通を図りつつ、教員と学生が一緒になって、相互に学び合える場を設定し、学生が主体的・能動的に課題を発見し、それに挑み、解答を見出していく能動的学修への転換の重要性を示したのである。つまり、この「質的転換答申」によって、大学が、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業への転換を図る方向性を明示したのである。なお、ここでは、アクティブ・ラーニングを「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称」としているが、本研究でも、これを定義とした。また、教育課程部会 教育課程企画特別部会（2016）で取り上げられた、アクティブ・ラーニング型授業を展開する際のポイントとされる「主体的・対話的で深い学び」について、田村（2016）は、「『対話的な学び』が行われることで、『主体的な学び』に向かう姿が生まれる」、「『対話』によって、物事に対する深い理解が生まれやすくなる」と指摘⁴⁾しているが、本研究でもこの「対話的な学び」こそ、アクティブ・ラーニングの中核にあるものと考え、研究を進める。

II 目的

アクティブ・ラーニングに関するエキスパート（「SGE<Structured Group Encounter>公認リーダー」有資格者注1））による「アクティブ・ラーニングを取り入れた授業展開」から、その授業モデルを提案する。

*連絡先：住本克彦 新見公立短期大学幼児教育学科 718-585 新見市西方1263-2

III 方法

アクティブ・ラーニングに係わる有資格者による「アクティブ・ラーニングを取り入れた授業」の準備・展開・事後指導の実践内容、特に学生の授業後の感想の分析（複数のカウンセラー有資格者によるKJ法活用）から、その授業モデルを提案する。なお、筆者は、県立教育研修所の主任指導主事等として、教職員の研修（主として、受講者「参加型・体験型」研修）を担当し、また、「S G E <Structured Group Encounter>公認リーダー」資格者としての実践（幼・小・中・高校・大学等における園児・児童・生徒、各学校園の教職員等を対象とした授業実践や研修講師等）も数多く重ね、日本カウンセリング学会第48回大会「研修プログラム」（2015）で「グループ・アプローチの理論と実際」のテーマで講師も務めている。

IV 授業実践（保育士養成校における実践）

1 【科目の位置づけ】

●「保育原理」：当該時間の目標（12/15回目）：現代の保育の課題について理解させる。

2 【授業目的】：本授業では、保育の意義、目的、方法について理解させ、現代の保育課題についても確認させ、その解決方途を探らせることを目的とする。

3 【到達目標】

- ① 保育の意義について理解する。
- ② 保育所保育指針における保育の基本について理解する。
- ③ 保育の内容、方法について理解する。
- ④ 保育の歴史的変遷について理解する。
- ⑤ 保育の現状・課題について考察し、その解決方途を探る。

※グループ活動、ディスカッション、プレゼンテーションを通して、コミュニケーション能力を身につけるとともに、自己理解を深め、自己の活かし方を考えさせる。キャリア教育の一環でもある。

4 【授業の概要・全体の留意点】

学生一人一人に「保育とは何か」の問いから始め、課題についても、学生自身が見つけ出すよう学習展開をしたい。そして、すぐれた保育が、いかに子どもの心身を健全に育てるかの視点から、具体的な事例（例えば、「食育を進める際の課題と手立て」等。）を見つめながら学びを進めたい。また、適宜、質疑応答しながら、教員と学生が双方向で授業展開したい。

5 【対象学生】

◎55名（5名×11班）

（承諾の取れた幼児教育学科1年生）

6 【教育方法の特徴】

授業担当者が、机間巡視をしながら各グループ、個人へのアドバイスをする。グループワークによるアクティブ・ラーニングの試みを導入し、筆記力、課題設定力、課題解決力、コミュニケーション能力、自己理解力、プレゼン力等の、体験的な習得を図った。また、必要に応じて、KJ法を導入し、話し合い後、論旨をまとめ、全体会で発表する経験を積ませた。また、各回の終わりには、学生に授業内容を振り返らせ、レポートを記入させて回収し、次の授業時間には、授業担当者がコメントを記入したものを返却するサイクルを重ねた。本報告は、第12回目の授業報告である。

7 【教室空間の特徴】

幼児教育学科 1年固定教室を使用した。各グループで、机を向かい合わせる形を取り、互いに顔が見える形でグループワークを進めさせた。

8 【当該時間の授業の流れ・時間配分等】

- ① 前回のレポート返却（SA）（5分）
- ② 本時のねらいの確認・本時の流れの説明（5分）
- ③ 授業担当者によるインストラクション（3分）
 - ・グループワークの意義、ワークシートの説明等
- ④ グループワーク
 - ・役割決め（2分）
 - ・話し合い活動（25分）
 - ・まとめ（10分）
- ⑤ 全体発表（25分）
- ⑥ 本時の振り返り（レポート記入）（10分）
- ⑦ 授業担当者によるまとめと次時の課題確認（5分）

9 【学習成果の評価方法】

授業担当者が、提出されたレポートを基準に沿って評価（各項目：5段階評定）。①課題内容理解力 ②思考力 ③論理構成力 ④文章表現力（表記の正確性等） ⑤その他、参考・引用文献の明示等

10 【準備物】

- ① マジック（複数色）
- ② 模造紙（班の数）
- ③ 新聞紙（模造紙の下に敷くもの）
- ④ 付箋紙（複数色：「課題」色と「手立て」色等）
- ⑤ 磁石（模造紙の4隅を留める際に使用）
- ⑥ ワークシートNo.1・No.2

11. 【レディネス】

- ① 「保育の意義」について理解している。
- ② 「乳幼児の発達特性」について理解している。
- ③ 「保育方法の原理と実践」について理解している。
- ④ 「教育課程」「保育課程」の基本について理解している。
- ⑤ 事前課題としての、現代の保育の課題について調べてきている。

12. 【その他、ルールの確認など】

<話し合いの決まり>5)

- ① 全員参加での話し合い。
- ② 話し手は最後まで話し、聞き手は最後まで聴く。
- ③ 聞き手は、話している人の方を向く。
- ④ 自他の人権の尊重を心掛ける。
- ④ 自分達でまとめた意見は尊重する。
- ⑤ 他者の意見を尊重し、否定しない。
- ⑥ 反論する場合は、代替案を提案する。

V 結果

以下、本授業後の学生の評価・自由記述感想を、KJ法を活用して分類した。

【当該授業についての学生評価・自由記述感想】

<注:n=55複数回答可、()内件数、3件以上を列挙>

- ① 学習意欲が高まった<持続した> (11)
- ② 集中力が増した<持続した> (10)
- ③ 自分達で決めたテーマだったので、より真剣に取り組めた (8)
- ④ 理解力が増した (8)
- ⑤ まとめる力がついた (7)
- ⑥ 発表することで自信を持てた (6)
- ⑦ グループワークを通して協調性が高まった (6)
- ⑧ 人間関係が広がった (6)
- ⑨ 人間関係が深まった (5)
- ⑩ あまり話さなかった人とも話せるようになった (5)
- ⑪ 同じ意見の人に対して親近感が高まった (5)
- ⑫ 教師のアドバイス・まとめが良かった。<教師の要所での介入の仕方が良かった> (5)
- ⑬ 学生自ら主体的に取り組む授業の方が、教師からの教え込みの授業より、ためになる (5)
- ⑭ 多様な意見が参考になった (5)
- ⑮ グループの方が、全体より発表しやすい (5)
- ⑯ 教師のアドバイス<机間巡視時>で安心できた<うれしかった> (4)
- ⑰ グループで安心して発表できた (4)
- ⑱ 全体で安心して発表できた (4)
- ⑲ 「考えること」を大切にする授業は楽しい (3)
- ⑳ 自分と違った考えに触れること<話し合い>が楽しい

(3)

- ㉑ 話し合うことで、自分の意見がより明確になった(深まった) (3)
- ㉒ 意見を聴いてもらってうれしかった (3)
- ㉓ 座席配置が変わって、やる気が出た (3)
- ㉔ 親切な人が多いクラスなので、学習に集中できた (3)
- ㉕ 助け合えるクラスなので、自分の意見を言いやすい (3)
- ㉖ 多様な意見も認め合えるグループ、クラスなので学習に取り組むベースができていく (3)

VI 「対話的な学び」を中核に据えたアクティブ・ラーニング型授業のポイント

以上の結果より、本形態を導入することで、「意欲」「集中力」「理解力」の高まりが確認できる。また、参加者同士の「親和度」が増し、「協調性」も高まっている。さらに、授業者は、要所要所での指導や助言にとどめることも重要である。また、「対話」を通して、他者の意見に触れることでの考えの深まりや、学びの楽しさも実感している。「多様な意見も認め合えるグループ、クラスなので学習に取り組むベースができていく」等の感想は、アクティブ・ラーニング型授業の活用と学級づくりの関連性の大きさを示唆しているとも言えよう。

次期学習指導要領においては、「育成すべき資質・能力」として、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力 人間性等」の3つを上げている。田村(2016)は、「アクティブ・ラーニングで目指す『対話的な学び』とは何か」のインタビューの中で、「これらの育ちを実現するために、『主体的な学び』『対話的な学び』『深い学び』が行われることが必要」とあり、「三つの視点からより、一体的となる学びの実現をイメージして」いくことが大切であるとしている^{前掲4)}。特に、『深い学び』については、各科目等で、その科目なりの「見方」「考え方」を学ぶだけではなく、学生が、将来未知の課題に直面した時、今まで学んできた見方・考え方を駆使して、自分なりに課題解決するところまで高められるような学習の在り方を指すのである。つまり、学生は、グループワークや全体発表での『主体的な学び』(自ら課題設定等)、『対話的な学び』(グループや全体での話し合い活動等)を通して、『深い学び』を体得していくのである。

また、学級経営との関連についても、「学習指導で、多様な存在を認め合う学びや、自分と違う意見を知ることによって自分の意見がより深化・発展したという喜びを得るという経験を繰り返していくことが、よりよい学級経営につながり、その学級風土がまた次の学習指導を豊かに」していくと述べている。この点では、既述の、「V 結果」の中の「【本授業についての学生評価】」の、⑦～⑫、⑯、㉓～㉕等は、まさに、アクティブ・ラーニングで目指す『対話的な学び』

のベースに学級づくりを置くことの重要性が示唆されたとも言える。きめ細やかな学生支援の立場から、学級担任制を導入する大学が注目される中、アクティブ・ラーニングと学級づくりとの関連性、「i-check」の大学生用の開発についても今後検討していきたい。

また、ワークショップ学習のアクティビティーを提唱する、田中（2010）も、「まず初めに、自分の学級の子どもたちが人間関係や社会性においてどのような課題を持っているのかをとらえることが大切」⁶⁾ だとし、教師が、学級集団の実態を把握しておくことの大切さを指摘している。この学級集団のアセスメントツールとしては、「Q-U」,「hyper-Q-U」（いずれも、河村茂雄, 図書文化社）や、「i-check」（梶田毅一・住本克彦, 東京書籍）などがある。この「i-check」では、「自己肯定感」「規範意識」等、13の視点で、子どもの個性や今の心の有り様を立体的に描き出し、第1カテゴリーとして4つの項目-《自己認識》《社会性》《学級環境》《生活・学習習慣》を立て、その下位に第2カテゴリーとして、13の質問群を設定し、多面的に児童生徒の今の状況を測る総合質問紙テストである⁷⁾（参考資料、図1参照）。以下に、これを実施した教員の感想を上げる。

①レーダーチャートで、学級の実態が把握しやすい。②教師の観察との併用がポイントである。③「いじめのサイン」の項目で、いじめの早期発見ができる。④「いじめのサイン」の項目で、人権教育推進の学校・学級の指導の評価ができる。⑤散布図で「いじめ」や「疎外感」の現状が把握できる。⑥児童生徒個人の詳細な実態を把握できる。⑦各学期実施の結果比較により、教師の教育実践を振り返ることができる。⑧専門家の適切な指導助言が受けられる⁸⁾。

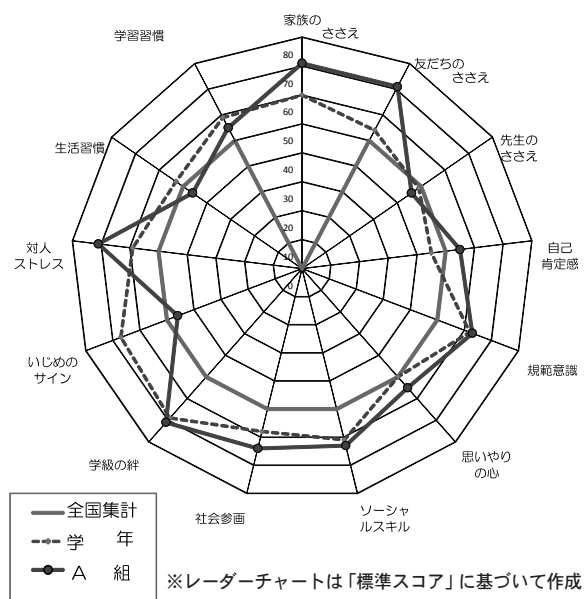


図1 『i-check』レーダーチャートによる学級実態把握

また、評価について田村（2016）は、①「見るための尺度＝評価基準を持つこと」（目指す子どもの姿をイメージする）②「時間軸でつなぐこと」（経過に注目する）③「空間軸でつなぐこと」（発言、ノート、表情等をつなぐ）等による評価を進めるとしている^{前掲4)}。

こういった視点をふまえた上で、既述の授業展開から、「対話的な学び」を中核に据えたアクティブ・ラーニング型授業を実践する際のポイントとして、以下の点が上げられる。

1 【「本時の目標」の確認】

●教師はもちろんのこと、学生においても、本時のねらいを授業の導入で確認させる。教師は、授業終了時の育てたい学生像をイメージしておくことが大切である。

2 【アクティブ・ラーニングを「手段」と位置づけること】

●本授業では、保育の意義、目的、方法について理解させ、現代の保育課題についても確認させ、その解決方途を探らせることを目的としたが、そのねらいに迫るための手段として、アクティブ・ラーニングを活用した。

3 【アクティブ・ラーニングを活用する意義の認識】

●グループ活動、ディスカッション、プレゼンテーションを通して、コミュニケーション能力を身につけるとともに、自己理解を深め、自己の活かし方を考えさせる。キャリア教育の一環でもあることなどを認識しておく。

4 【自己評価の観点】

- ①「各回のテーマについてのまとめ・理解度：5段階評定」
- ②「自己への気づき」
- ③「個人で頑張ったこと」
- ④「グループで頑張ったこと」
- ⑤「他のグループ（個人）のよかったところ」
- ⑥「今後、自分で調べたいこと」
- ⑦「質問（確認）したいこと」
- ⑧「資料・文献などにふれ、自分の考えが広がったり、深まったりしたこと」

5 【評価】

授業担当者が、提出されたレポートを基準に沿って評価。①課題内容理解力 ②思考力 ③論理構成力 ④文章表現力（表記の正確性等） ⑤参考・引用文献の明示 ⑥その他、「見るための尺度＝評価基準を持つこと」（目指す子どもの姿をイメージする）「時間軸でつなぐこと」（経過に注目する）「空間軸でつなぐこと」（発言、ノート、表情等をつなぐ）等。

6 【ワークシート等の活用】

対話を進める際、ワークシートを活用しながら進行すると、スムーズな進行に結びつく（表1、表2参照）。

【表1 ワークシート①：役割・進行表】

学科：	学年：	番号：	名前：
テーマ：			
役割	司会者（進行役）： 副司会者（進行役）： 記録者（会議録作成）： 発表者（全体会発表）：		
活動内容	<p>●司会者（進行役）</p> <p>①ねらいの確認：保育者としての具体的実践内容をまとめる。</p> <p>②進行の流れ：ア）ねらいの確認と協力依頼 1分 イ）テーマ確認・役割確認 2分 ウ）個別表の完成 5分 エ）班内発表 15分 オ）まとめ 3分</p> <p>●副司会者（進行補助）</p> <p>●記録者（メモを取りながら）</p> <p>●発表者（全体会で発表）：各班3分</p>		

【表2 ワークシート②：司会をする時の留意点】

司会をする時に気をつけること【1グループ：4, 5人】
<p>① 話し合いがテーマからそれないようにすること。 「今から、……について話し合います。」 「話し合いがそれているので、……テーマを確認します。 テーマについて意見を出してください。」</p> <p>② 何が課題か、話し合いはどこまで進んだのかを、常に確認する。 「今の〇〇さんの意見は、……ということでもいいですね。」 「……については決まったので、次に……について意見を出してください。」</p> <p>③ 話し合いが止まってしまった場合は、意見交流させる。 「隣の人と少し話し合ってみてください。」</p> <p>④ いつも同じ人ばかりを指名しないように、多くの人から意見を出してもらうようにする。 「〇〇さんは、このことについてどう思いますか。考えがまとまっていたら、意見を出してください。」</p> <p>⑤ すぐ多数決にしてしまわないで、みんなで話し合いながら、意見をまとめていくことが大切です。 「賛成意見が多いので、……でもいいですか。」 「多数決で決めてもいいですか。」</p> <p>⑥ 話し合いの途中で時間がきてしまったら、 「時間がきてしまいました。どうしたらいいですか。」</p> <p>⑦ どうしても決まらない場合は、次回に持ち越す。（時間厳守）</p>

7 【レディネスについての把握】

- ・発達段階をふまえたレディネスの確認。
- ・事前の課題への取り組み。

8. 【学級経営との関係性】

- ・常時、学級の実態を把握しておく（学級の課題を明確に把握する）：教師の観察・日記指導・グループノート指導・学級集団のアセスメントテスト等より。

9 【教師の介入時について】

- 教師は、「待つ」「見守る態度」が基本であるが、学生の主体的活動は尊重しつつも、以下のような場合は、適切な指導が必要である。

- ① 発表がなかったり、論点が偏ったりした時
- ② 論点がそれたり、行き詰まったりした時
- ③ 話し合いが深まらず、採決が早すぎる時
- ④ 意見が対立して収拾がつかなくなった時
- ⑤ 自治的活動の枠を越えそうな時
- ⑥ 実践の可能性がない時
- ⑦ 人権を守る観点から逸脱しそうな時

10【教師の全体会後の指導について】

●「全体会後の教師の指導」では、学生への称揚・意欲化を図ることがポイントになる。

- ① 本時のねらいに沿った助言を心掛ける。
- ② 建設的な意見をほめる。
- ③ 司会者等、役員の労をねぎらう。
- ④ 前回と比べ、伸びの著しい学生を具体的にほめる。
- ⑤ より深い学びへの意欲づけを図る。
- ⑥ 簡潔な助言、次の活動の動機づけとなるような助言をする。



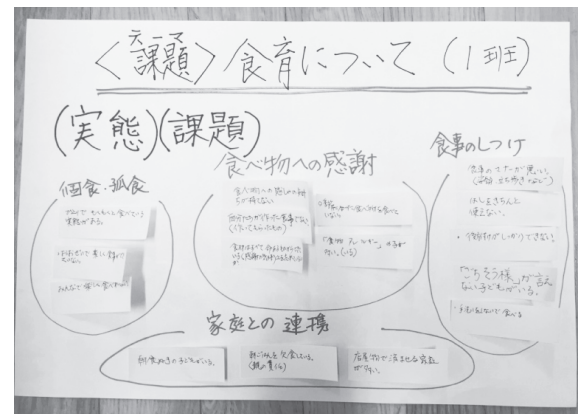
【写真1 授業風景①：グループ協議】



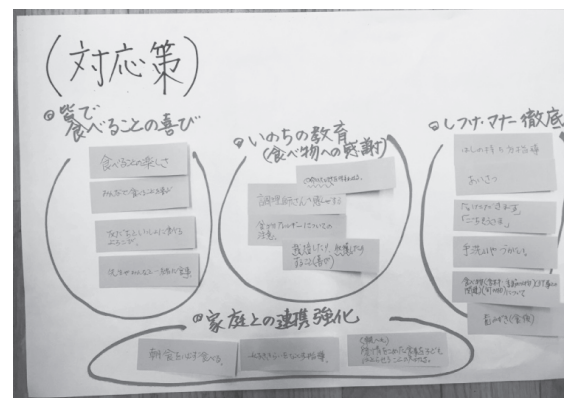
【写真2 授業風景②：グループ協議】



【写真3 授業風景③：全体発表】



【写真4 テーマにおける課題】



【写真5 テーマにおける対応策】

VII まとめと今後の展望

本授業における課題としては、以下の5点が上げられる。

- ① グループワークが苦手な学生への支援の在り方。
- ② 主体的能動的学習を充実させる学習環境の整備（一層

のICT活用の充実等)。

- ③ 教職員の研修参加による教育実践力向上。
- ④ 学級経営と主体的能動的学習の推進との関連性の研究。
- ⑤ 体制づくり

田中(2010)は、学級経営とワークショップ学習の関連性について指摘し^{前掲6)}、住本(2012)も、まず教師自身が、研修を通して、アクティブ・ラーニング型授業の指導力向上の重要性を示唆している⁹⁾。

梶田(2016)は、『目指すべき主体的能動的な学習(アクティブ・ラーニング)とは』の中で、この学習を進めるにあたって大前提としての3つのポイントを明示している。「学校でのあらゆる学習活動を主体的なものにするという指向性を表現する」、「学習の在り方を主体的能動的(アクティブ)なものにするということは、それによってディープ・ラーニング(深い学び=事象の相互関連の理解とそれに基づく問題解決力の獲得)が実現し、主体的能動的な思考力や問題解決力が育成される、という結果が伴わなければならない」、「主体的能動的な(アクティブ)学習ということは、学習者が活発に動いているといった見込みの活動形態の問題でなく、学習に対する心理的な取り組み方、精神的な基本姿勢の問題である」¹⁰⁾

いずれにしても、我々教師が、こういった基本的視座に立ち、既述の課題解決に向けた方途を探りながら、「対話的学び」を中核に据えたアクティブ・ラーニング型授業展開を重ねていくことが肝要である。

謝辞

研究にご協力いただいた学生の皆さん、並びに保護者の方々、関係の皆様、衷心よりお礼を申し上げますとともに、本稿が、本学はもとより、教育現場の授業改善や、児童生徒学生の皆さんの学習面、生活面のより一層の充実の一助になれば幸いである。

注1) エンカウンターとは、本音を表現し合い、それを互いに認め合う体験のことである。この体験が、自分や他者への気づきを深めさせ、人とともに生きる喜びや、わが道を力強く歩む勇気をもたすとされる。構成的グループエンカウンターは、開発的カウンセリング技法の一つで、リーダーの示した課題をグループで行い、そのときの気持ちを率直に語り合うこと「心と心のキャッチボール」を通して、徐々にエンカウンター体験を深めていくもので、「集団は教育者である」の理念を持ち、人間関係づくりや、自己肯定感の育成等に大きな効果を上げる。リーダーは、個人の内面の動きや集団の動きを把握しながら、絶えず臨機応変な対応が求められる。したがって、SGEのリーダーは、アクティブ・ラーニングの

中核にある「対話的な学び」をリードするアクティブ・ラーナーそのものと言える。「SGE(Structured Group Encounter)公認リーダー」は、教育カウンセラー協会認定の資格である。

文献

- 1) 国立教育政策研究所：教育課程の編成に関する基礎的研究報告書5 社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則、26-30、2013。
- 2) 溝上慎一：アクティブ・ラーニングと教授学習パラダイムの転換、東信堂、25-48、2014。
- 3) 中央教育審議会 答申：新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて－生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ－、9、2014。
- 4) 田村学：対話的な学びとは何か、月刊教職研修、9、20-23、2016。
- 5) 住本克彦：コミュニケーション能力を高めるために、一カウンセリング技法を活用して一、兵庫県明石市教育研究所 所報 平成25年度版あかしの教育、1-4、2013。
- 6) 田中博之：学級力が育つワークショップ学習のすすめ、24、金子書房、2010。
- 7) 梶田叡一・住本克彦：子どもたちが輝くクラスづくりのための総合質問紙『i-check』、東京書籍、2016。
- 8) 住本克彦：「いじめ防止教育プログラム」の開発研究 Iー総合質問紙『i-check』を活用した「いじめ防止教育プログラム」、環太平洋大学研究紀要、8、135-146、2012。
- 9) 住本克彦：大学における「ワークショップ型研修方式」導入による教職員研修の在り方に関する一考察、環太平洋大学研究紀要、6、117-126、2012。
- 10) 梶田叡一「主体的能動的な学習ーアクティブ・ラーニングの精神を生かすー」、教育フォーラム58、6-8、2016。